カモメの家

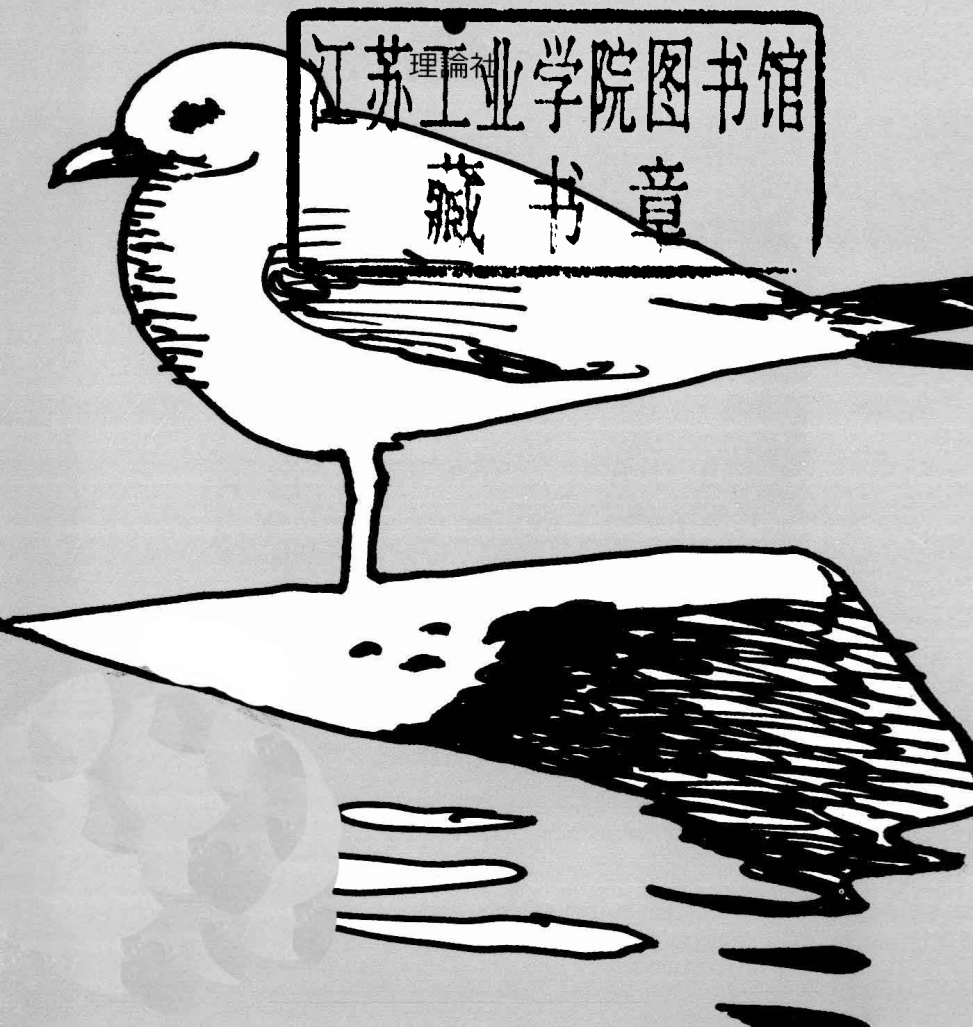
山下明生＝作
宇野亜喜良＝絵

カモメの家

山下明生

宇野亜喜良・絵

理論社
江苏工业学院图书馆
藏书章



カモメの家

NDC913
B6判 19cm 366p
1991年11月初版
ISBN4-652-04211-6

山下明生(やました・はるお)
1937年東京に生まれる。少年時代を瀬戸内の能美島ですごす。京都大学文学部仏文科卒業。出版社で児童書の企画・編集に携わる一方，童話や絵本を執筆。1974年編集の第一線を退き，著作に専念。毎年世界各地の海を旅する。作品に『かいぞくオネション』『島ひきおに』『まつげの海のひこうせん』(偕成社)『海のしろうま』『海のコウモリ』『さんまのさんすう』(理論社)『ふとんかいすいよく』(あかね書房)『屋根うらべやにきた魚』(岩波書店)『みんなでうみへいきました』(ポプラ社) ほか。現在『海のコウモリ』『カモメの家』につづく三部作の完結編『ガラスの魚』を構想中。
住所＝神奈川県横須賀市長沢367，1-8-404

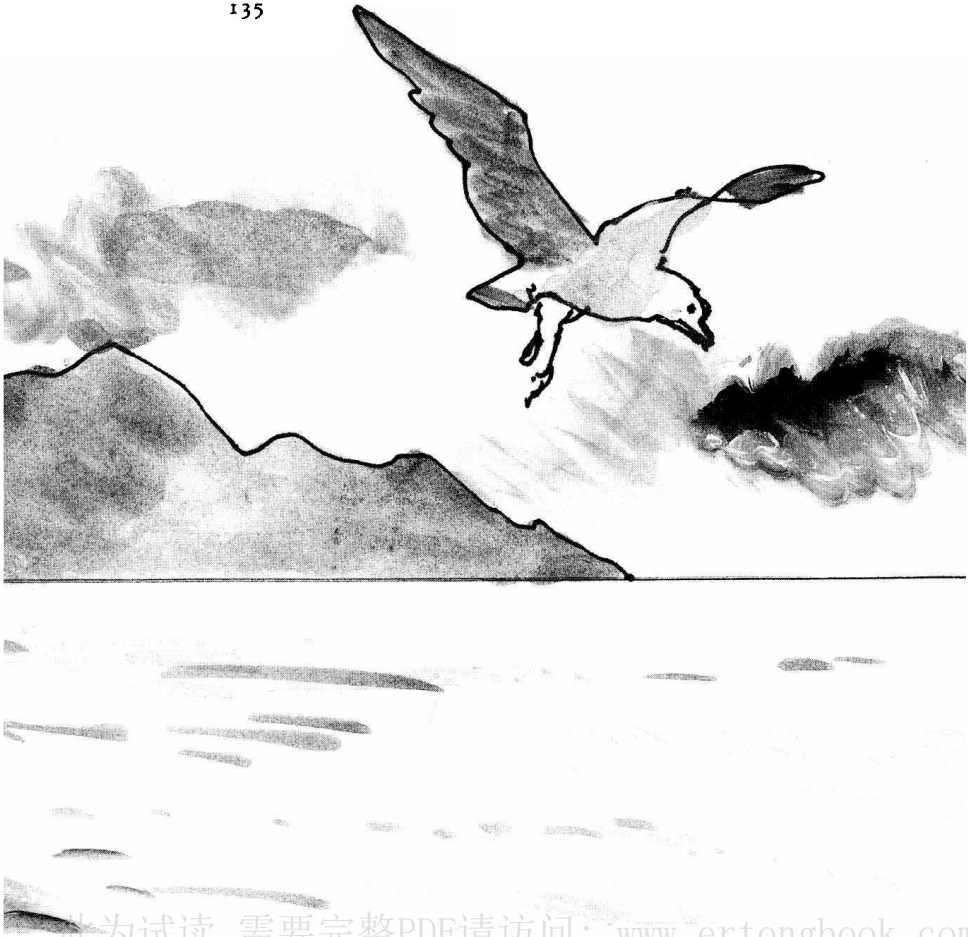
作者　山下明生
画家　宇野亜喜良
発行　株式会社 理論社
発行者　鈴木良司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03)3203-5791
出版 (03)3203-5794

1991年11月第1刷発行

©1991 Haruo Yamashita, Akira Uno Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

カモメの家　もくじ

第一章　わすれ雪　★　5
第二章　よかった節　★　26
第三章　消灯ラッパ　★　38
第四章　ひみつ兵器　★　67
第五章　こもり岩　★　92
第六章　にぎりずし　★　118
第七章　精神スリッパ　★　135
第八章　フグ釣り　★　151
第九章　イルカの宮　★　179

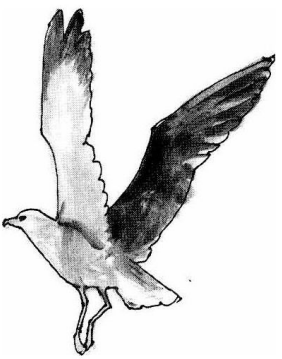


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十章　夜のブランコ ★ 204
第十一章　授業視察 ★ 221
第十二章　行水 ★ 239
第十三章　水門 ★ 259
第十四章　野犬狩り ★ 275
第十五章　のぞきたまご ★ 301
第十六章　かまぼこ指輪 ★ 314
第十七章　カモメの家 ★ 338
あとがき ★ 364

そうてい・さしえ　宇野亜喜良

第一章　わすれ雪



ナイフをとぐのは、むずかしい。
ぼくは、ナイフをといでいた。
フジ子姉ちゃんからもらった肥後守だ。
刃の先がぽろぽろ欠けて、あちこち赤さびが浮いているけれど、夢にまでほしかった肥後守――。

「アンチクショウヲ　キリコロセ！　アンチクショウヲ　キリコロセ！」
のろいの文句をとなえながら、ぼくは、ナイフをといでいた。
できることならこのナイフを、あいつのスイカ腹につきたててやりたい。氷イチゴみたいに、ぐちゃぐちゃにしてやりたい。そう思いながら、ぼくはナイフをといでいた。
でも、生まれてから十年やそこらで、もうキリコロシテやりたいやつがいるだなんて、なんてきびしい人生だろう！

「はたしてアキラ少年の運命は、この後いかがあいなりますことやら……」
ぼくは、紙芝居屋のおっちゃんの声色をまねして、口の中でつぶやいた。
それにしてもフジ子姉ちゃんは、ぼくがこんな折りたたみ式ナイフをほしがっていたこと、いつどうして知ったのだろうか？
フジ子姉ちゃんは今日、二番の連絡船で島を出ていった。中学校を卒業して、大阪の紡績工場に就職するのだ。ほんとうはフジ子姉ちゃん、島の夜間の定時制高校にいきたかったのに、木田のカイカイジーが、じゃまをしたのだ。
木田のカイカイジーは、ぼくの家の四軒隣りに住んでいる。もとは炭屋だが、今では高利貸しもやっていて、このあたりのほとんどの漁師は、カイカイジーからお金や炭を借りている。炭を借りても、お金で利子をとるのだそうだ。男のくせに、左手のくすり指にぶあつい金の指輪をはめている。もちろん、結婚指輪なんかじゃないよ。借金のかわりにだれかからまきあげたものにきまっている。
カイカイジーは、上にドがつくケチで、食べさせるのが惜しいからと嫁さんももらわない。屋敷には、ぐるりとセメント塀を張りめぐらし、塀の上にはごていねいに、とがったガラスのかけらを埋めこんでいる。いかにも「人を見たらどろぼうと思え」というとげとげしさで、前をとおるたびにいやな気分にさせられる。たいていの島の家は、おたがい信用し合って、夜もかぎをかけないで寝るというのにね。うちなんか、昼間も戸はあけっぱなし。とられる

ものなんか、なにもないもの。

自分でかんだ鼻紙を、かならずひろげてながめてから、それをまたたたんでポケットにいれるやつなんだ、カイカイジーは。

そうそう、カイカイジーというのは、ぼくがつけたあだ名。痔の病気がかゆいらしくて、しょっちゅう手をお尻にもっていくから、「カイカイノジ」をもじってカイカイジー。これに漢字の「怪々爺」を当てると、いかにも、紙芝居の黄金バットにやっつけられる悪漢みたいなすごみが出るでしょ。なにをかくそうこのカイカイジーこそ、ぼくがキリコロシテやりたい相手なのだ。

なにしろあのおやじ、「網元ごろし」なんていわれていい気になっているんだから。イワシ網のイリコを煮る薪を、島じゅうの網元に高い利子で貸しつけたりしているんだ。

ぼくたちのところはイワシ網が盛んで、このせまい地区にイチゴウ、ニゴウ、サンゴウ、ゴゴウ、ロクゴウと、五つも網元がある。シゴウがないのは、四は死につながってマンタがわるいからだ。マンタっていうのは、ふつう語でいうと縁起ってとこかな。

うちの本家はイチゴウだが、そのじいちゃんでさえ、「あそこに首を横にふられたら、わしらは首をくくらにゃならん」と、情けないことをいうくらいだから、フジ子姉ちゃんのところに少々借金がたまったって、たまげるものはいないはずだ。

ところが、おばさんがぜんそくがひどくなって働けず、おまけに去年の暮れ、おじさんが

血圧の病気でたおれて漁に出れないとなると、あの悪漢は、フジ子姉ちゃんから借金を取りたてる算段をこらした。そこでご親切にも、大阪のつとめ口をさがしてきてくれたというわけだ。

「日本は戦争に負けて、世界じゅうから大借金をしょいこんじょる。こんどようやく講和条約いうのが結ばれて、独立国にもどるんじゃ。だれもかれも働いて、国の借金を返さんことにゃ、世界じゅうから一人前にあつこうてもらわりゃせん。ハタラカザルモノ、クウベカラズ。そういう時代なんじゃ、今は」

これが、カイカイジーお得意の演説だ。そのくせ自分は、店をゲンさんと呼ばれるてつだいのじいさんひとりにまかせて、一日じゅうあっちでぺらぺらこっちでぺらぺら、アブラを売って遊んでいる。とくに最近は、サカリのついた三月ネコみたいに、うちのまわりをうろうろするから、目ざわりでしかたがない。なかには、うちの母に気があるのだと、ばかをいいだすやつがいる。うちには父親がいないから、そんなのはぜったいにこまるのだ。おかげで、死んでいるはずのうちの父親のうわさまで、こそこそとほり返されるようになってしまった。

ほんと、フジ子姉ちゃんのかわりにあいつが島を出ていくのなら、紅白のもちをまいてお祝いしてやったのに——。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昨日、晩ごはんのあとで、母がぼくにこういった。
「あんた、フジ子姉ちゃんにゃ、こまいときからさんざんお世話になったんじゃけん、あしたは早起きして、桟橋まで見送りに出んとバチがあたるよ」
もちろん、ぼくもそのつもりだった。
だけど、もうすぐ五年生になるというのに、なみだを見せたりしたらわらいものだ。たぶん、つげ口屋のトシオもくるにちがいない。トシオは、フジ子姉ちゃんといとこどうしだから。それでぼくは、けさは母よりはやく起きて、ひとりで港に先まわりしたのだ。
外に出ると、たいていの家はまだ雨戸を閉めてまっ暗だった。ただ、通りの左手のとうふ屋と、つき当たりのカープパンだけ、道に明かりがもれていた。とうふ屋とパン屋は、いつも朝がはやいらしい。
カープパンをすぎるとき、ぼくのおなかがググーと鳴いた。
カープパンは、去年転校してきた同級生の梅田ミツコの家で、ぼくたちのあこがれの店だ。トシオなんか、この前をとおるときには、「たまらん、たまらん」と、鼻の穴を二倍にする。中でパンを焼くにおいや、シュークリームをつくるにおいがたまらないのだ。ぼくも、この世にこんなにいいにおいがあるなんて、カープパンができるまで知らなかった。一生に一度でいいから、あのシュークリームを腹がさけるほど食べてみたい。
この店ができたおかげで、ぼくたちのクラスにも広島カープのファンがごそごそふえたく

らいなのだ。それでなくとも広島カープは、原爆都市から不死鳥のように生まれた新生球団ということで、おとなも子どももひっしで応援しているのだ。でも、クラスには、カープのファンにならずに、こっそりミツコのファンになっているうらぎり者もいる。

カープパンを右に折れて、五分もあるくと港に出る。

まるで自動車ほどもある大きな岩を三段、四段につみあげた防波堤が、港を内と外に仕切っている。連絡船の桟橋はその外側にあり、港の内側は漁船のたまり場となっている。

ここの大岩はなんでも昔、大阪城の石垣を築くために切りだした石材のあまりなのだそうだが、あんな時代にどうやってこれほどの工事ができたのか、ふしぎでたまらない。きっと、すぐれた石工がたくさんいたのだろう。

三年生の夏、ぼくは、東京からきたばかりのマスミちゃんとエビすくいをしていて、防波堤の岩の中にひみつのかくれ家を発見した。腰まで水につかりながら岩のあいだをくぐっていったら、子どもだけがとおれるくらいの迷路がつづき、そのすき間をのぼっていくと石の小部屋にたどりついた。たたみを一枚しけるくらいの広さで、横と天井に小さな窓まであいている。太陽の照りかえしが石の壁にゆらゆらとうつり、潮のにおいのする風が気持ちよく吹きぬけていた。ぼくたちはこのかくれ家を、「ひみつの城」と名づけた。

ここに寝ころがって波の音を聞いていると、時間のたつのをわすれてしまう。マスミちゃんは、「お母さまのおなかにいるみたい」とへんなこといってたけど、そんなころなんておぼ

えているわけないよね。

その「ひみつの城」に、ひとまずぼくが腰を落ちつけたとき、今日の一番船がはいってきた。船の波が岩のあいだから流れこみ、足もとの水と海草をかきまぜる。

ぼくは、石の窓に顔を寄せて外をのぞいた。

本土の造船所につとめる職工さんたちが、寒そうに背を丸めながら、船に乗りこんでいく。桟橋の標識灯が、暗い海に赤い光をにじませて、船に乗りうつる人の息が白い。

一番船が出ていくと、海でカモメがさわぎはじめた。

カモメは春をつれてくる鳥だと、本家のじいちゃんが教えてくれたが、今年は春のくるのがおそい。どっかで、道草でも食っているのだろう。

東の本州の空がほの白くなり、夜の漁からもどる漁船が、チャッチャの音を石の部屋にひびかせながら、船だまりにまわりこむ。カモメの群れが、しつこく漁船にまとわりついている。でも、カモメが追ってくるのは、魚をつんでいる船だけだ。漁があったかどうか、カモメが教えてくれるからおもしろい。

窓の外の、銀紙をしいたようななめらかな海にも、カモメが五、六羽浮かんでいる。静かに止まっているように見えるが、水の中で足がうごいているらしい。カモメの黒い尾羽根のあとに、かすかな波紋が、末広がりにのびていく。

水の中でカモメは、しもやけにならないのだろうか？

ぼくは、ひえた両手をこすりあわせながら、つぎの二番船を待った。夜明けのつめたさが骨までしみこんで、鼻水がたれる。もうお彼岸だというのに、いつまでも寒い。フジ子姉ちゃんがいなくなるから、春もくる気がしないのか――。

ぼくが小さかったとき、フジ子姉ちゃんはぼくの鼻水を、口でちゅっとすいとってくれた。漁業組合の寄り合いで母の帰りがおそい日は、ぼくの家に泊まりにきてくれたフジ子姉ちゃん。

かたいイチジクみたいなおっぱいを、寝巻きの上からさわらせてくれたフジ子姉ちゃん。足がつめたくて眠れないとき、ふとももにぼくをはさんでくれたフジ子姉ちゃん。耳のしもやけがかゆいとき、両手でこすってくれたフジ子姉ちゃん。働き者のフジ子姉ちゃんのてのひらには、マメがいくつもできていて、なでてもらうと痛がゆかった。

そんなことを思いだしつつ、ぼくは、しだいに明るくなっていく水の底に目をやった。

白いお皿のようなものが、海草の根もとでゆらいでいた。ワタリガニの腹だった。クサフグやトッコセイやギザミやギンポが、寄ってたかってそのワタリガニをおもちゃにしていた。最後にウナギのマッカーサーがぬっと出てきて、そんな小魚たちをにらみつけた。ウナギのマッカーサーとはここの主で、威風堂々の態度なのでアメリカのマッカーサー元帥をあだ名につけてやったのだ。

死んだカニの白い腹は、なんだか人の顔に見えた。泣いているような、わらっているよう

な——。

待合室のほうが、活気づいてきた。二番船に乗る客が、港に集まってきたのだ。あの中に、フジ子姉ちゃんもいるにちがいない。

出ていこうかどうしようかとまよいながら、両手をつっぱって岩のすき間をはいのぼり、堤防の上に首だけ出した。そういえばいつかも、こうやってとうふ屋のカミナリばあさんを、おどかしたことがある。

そうそう、あれは去年の四月一日。四月バカとかいう日がはやりだして、だれをだまくらかしてもいいと聞いたものだから、マスミちゃんと相談して、ぼくがここから首をのぞかせた。その首に上からマスミちゃんが、魚の血のついた新聞紙に穴をあけたのをはめこんだ。そうすると、ちょうど堤防の上に生首が置かれているようなかっこうになるでしょ。

マスミちゃんは大よろこびで、カモをさがしにはしっていった。

そのすきに、とうふ屋のカミナリばあさんがやってきたわけ。トコロテンの原料のテングサを竹かごいっぱいに背おい、堤防の石の上に干しにきたのだ。

カミナリばあさんは、足もとを気にしながらあごをつきだし、一歩一歩ぼくのほうにちかづいてきた。だまっているのもわるいので、「こんにちは」と声をかけた。それが、いけなかったらしい。

カミナリばあさんは、「ぐえっ！」とさけび、またを開いてすわりこんだ。腰を抜かしたのだ。

すわったままカミナリばあさんは、こぼれたテングサを両手でつかんで、ぼくの顔に投げつける。そのとき、マスミちゃんがもどってきて、「今日はエイプリルフールいうて、四月バカの日ですから……」と、いいわけしてくれたが、

「なにがバカじゃと。このくそがき！」

ばあさんはますますおこって、ぞうりでぼくになぐりかかった。あわてて首をひっこめようとしたら、あごが石につかえて、もうすこしで首つりになるところだった。

マスミちゃんは、オトコオナゴと呼ばれるくらい気の弱い男の子だから、まっ青になって泣きだすし、ほんと、ひどい四月バカだったよ、あれは。

それいらいぼくは、なるべくカミナリばあさんとはつきあわないようにして、この一年間をすごしてきた。

——まさかあのばあさん、フジ子姉ちゃんを見送りにきてはいないだろうな。

それが心配で、待合室を目でさがした。

げっとなった。

待合室の前で尻をかきかき空もようをながめているのは、カミナリばあさんよりもっと顔を合わせたくない、カイカイジーではないか！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com